

も、マルサスが多数人間の貧窮と罪惡との原因を人口増殖の過剰法則に歸し、社會經濟制度の罪としなかつたことは、慥かに資本的經濟主義を擁護したものと認むべきである。『多くの人間が貧乏であつて悲惨なる生活を送らねばならぬのは、何も資本家本位の經濟制度が悪いので無く、自然の法則として人口が過剰に増殖するからである。而して貧乏人は自己の生殖力を制限せずして、無節制無反省に多くの子供を作るから、益々貧亡を重ねるのである。彼等が其の一生を通じて窮乏の生活を送らねばならぬのは、要するに自業自得である。資本家や金持の知つたことで無い。貧乏人が其の窮境より脱却したいならば、生殖力を制限して澤山子を生まぬがいゝ』と云ふ論法であるから、資本家や富豪がマルサスの人口論を大に歓迎したのは當然である。ゴドウィン等の共產主義に脅かされて、寢覺めの惡かつた當時の金持や資本家に取つては、恐らくはマルサスの人口論は天來の妙音のやうに響いたことであらう。否、今日の資本家階級

に於ても之を以て千古不磨の眞理と看做し、資本家本位の經濟制度を擁護するに必要な一學説となしてゐるのである。

此の如くマルサスの『人口論』は、元來佛國革命の波瀾が歐洲諸國內に逆捲いて居た當時、ゴドウィン及びコンドルセーによつて主張せられた萬民平等の生活及び幸福の權利を基調とせる社會主義共產主義に反對し、資本主義の經濟制度を擁護すべく生れ出でたものである。それ故、社會主義を奉ずる者の大部分は、いづれもマルサスの人口論を攻撃してゐる。例へば獨逸のベーベル Bebel の如きは『吾人は歐洲に於て一層高等の文化に達しなければならぬ。人間は決して過剰でない。否、寧ろ不足してゐるのである。而も新發見新發明は世に踵出して食料は益々増加する。中央及び南亞米利加、就中、巴西の如き豊饒なる地は今日と雖も殆ど開放せられて居らないから、之を耕作すれば、更に一層多くの食料を生産し得られる』といひ、『人間を増加せしめることは文化の



名に於て人間の爲す處の職分である』と説いた。またクロポトキンの如きもマルサスの説に反對し、工業、農業に關する知識及び技術の發達は、食物の生産量を益々豊富にし、また未墾地を豊饒の沃土に化することが出来るから、人口の増加は決して憂ふるに足らず』と云つてゐる。而して社會主義及び共產主義の信者は人の知るが如く、貧窮及び罪惡の原因を私有財産制度に歸し、在來の資本的經濟制度を全廢して、生産機關を公有共有となすことに依つて、貧窮罪惡を人間社會から根絶し得ることを主唱するものであるから、マルサスの人口論とは全く其の根柢を異にしてゐる。彼等がマルサスを攻撃して一步も假借しないのは實に當然の次第である。

吾人もまたマルサスが多數の人間の貧窮と罪惡とを人口過剰の自然法則のみに歸して、社會經濟制度の缺陷を度外視し、資本家を擁護する論調の歴然たるを見て、慊らざる所が甚だ多い。殊に有産者と勞働者との階級的分裂を以て、

不可避の自然法則より出でたるものなりとし、人爲的制度の缺陷に基因するものに非ずと看做せるが如きは、資本的經濟制度を謳歌せるもまた甚だしき偏見である。さりながらマルサスの人口の増加率は食物の増加率よりも大なりといへる説に至つては、慥かに動かすべからざる事實であり眞理である。尤も人口が幾何的級數の割合を以て増加し、食物が算術的級數の割合を以て増加すると云ふことに就いては固より確實なる證明も無く、且つ人口の増加率及び食物の増加率は各國を通じて一定不變のもので無いが、併し兎に角、人口の増加が食物の増加に優るといふことは之を自然の法則として認容せざるを得ない。人口の増加は無限であり、土地には制限がある。限りある地球の表面に限りなく増加する人口を收容しきれないのは明白なる計算であつて、たとひ今日猶ほ開拓せられざる國土が開拓せられ、また農業、工業上の知識技術が進歩して食物生産量が増加するにしても、人口増殖の駉々として止まない限りは、何時かは食物



の需要と供給とに不權衡の生ずるに至ることは論を俟たざる所である。若し遠き將來に於て空氣中の炭酸より澱粉、脂肪等を製造し、窒素より蛋白質を製造するが如き工業上の新發明が現はれたならば、之によつて始めて食物供給の不足を補ひ、限りなく増殖する人口を養ひ得られようが、併し此の如き新發明の現はるゝことは前途遼遠である。

前世紀以來科學は驚くべき進歩を告げ、殊に其の應用的方面に於て、造化の妙を凌ぐ許りの新發明新發明の踵出したことは周知の事實であるが、併し今日までの状態を見るに、人間の生活に對して直接に須要なる衣食の資料を増加すべき新發明新發明に至つては遺憾ながら之を認むることが出来ぬ。看よ、空氣中の窒素を固定して硝酸を製造する方法の發明も、爆裂藥の原料を造り、また「サトウライト」の發明も、大豆の蛋白質を化して塗料可型料となすものである。幾多の新藥、染料、香料等は陸續製出せられても、人間の飢渴を癒やすの

役に立つものは無い。それから榮養品の名の下に生れ出づる所の澤山の食料品とても、決して人工で創製せられたのでは無く、天然の食料に多少加工したものに過ぎないのであるから、却つて天然食料の實量を減少してゐるのである。之を要するに、科學の進歩技術の發達も、多くは不生産的或は破壊的の物質を製造するに過ぎざる新發明新發明を生むに留まり、未だ嘗て人工的に食料を創造新生するが如き人生須要の發見を生ずるに到らないのである。されば遠き未來はいざ知らず、限りなき人口の増殖に伴うて、食物もまた限りなく増殖するといふやうなことは今日の處容易に期待することは出来ない。

此の如く觀察すればマルサスの人口論の核心たる『人口の増加は食料の増加よりも大なり』といへる所説は大體に於て動かすべからざる眞理なりと認めざるを得ない。されば獨逸の經濟學者ワグネル Wagner もマルサスの説に賛同して、Robert Malthus behält in allem wesentlichen recht! と云つた。



尤も地球の表面には今猶ほ耕作せられざる沃土も尠く無い。オリノコ、アマゾンの平原等は未だ開墾せられず、南米の豊饒なる沃野も人口猶ほ稀薄であり、北阿、北亞等に於ける沃土の中にも耕作不十分なる處が可なり多くあるから、將來是等の廣大なる地方が開墾せらるゝに至らば、食料生産額が著しく増加するに違ひない。併しそれにしても無限に増殖する人口に追いつくことの不  
 可能なるは明かである。尤も當分のうちは、食料生産の増加によつて人口を支持して行けることは疑ひなき所であるが、併しそれは世界的に食物の供給せらるゝ場合のことで、例へば小麥の如きは世界各地に生産せられるから、之を常食とする歐米諸國の國民は、當分の處其の不足缺乏を來すこと無きにしても、若し一たび國際的に戦争の勃發する時は、一國より他國に供給すべき食料の輸出が杜絶せらるゝ虞がある。現に最近の世界戦争に於て、獨逸兩國が聯合國より食物の封鎖を受け、國民の大部分を擧げて饑餓に瀕せしが如き一大悲惨事の

起つたことは、國家の食料的經綸の上に多大の教訓を與へ、吾人をして國內に於ける食物の自給自足の必要なることを切實に感せしめた。されば世界的には食料生産額が増加するにしても、國家の經綸上に於ては食料の自給を圖るの要がある。そこで翻つて我國の状態を見るに、人口は比年増殖する一方であつて、大正九年の國勢調査には既に大約六千萬の人口に達したが、次回の國勢調査には七千餘萬に増加すべきことは殆ど疑が無い。然るに日本人の常食とする米穀の生産高が之に伴うて、果して七千萬石に達するや否やは疑問である。世の論客の中には、日本人も米食を廢して麵麩食に改むべきことを主唱し、其の證據として、米穀は世界に産額少きも、之に反して小麥は世界到る所に生産せられる故、須らく世界より小麥を輸入して之を常食とする方が、人口の過多なる日本國にとつては大なる利益であり、また國民經濟上に於ても、價格の變動多き米よりも、價格の變動の少い麥を食する方が、國民の生活を安定ならしむ



る所以であると云ふのである。一應尤もらしい議論であるが、併し二千有餘年以來、日本人の常食とせる米穀を棄て、小麥に代へよと云ふが如きは、實際上不可能な話である。よしや數歩を譲つて小麥を常食とすることに改めても、前既に述べた如く、立國の安全を計るが爲めには食物の自給を講じなければならぬ。決して外國よりの供給に安心依頼すべきで無い。最近の世界戦亂に於ける事實を見ても、戦争中、英國は其の領國に命じて麥類を他國に輸出するを禁じたでは無いか。若し我國にして當時既に米食を廢して、麵麩を常食として居たとすれば、如何に食物の不足に苦んだであらう。而して其の結果は到る所に一揆暴動が盛んに行はれて、國家をば甚だしき不安の状態に陥れたこと、恐らくは米騒動の比では無かつたであらう。されば食物の自給自足を圖ることは、立國の安全を期する上に於て最も必要な事柄である。

然るに轉じて我國に於ける耕地面積を計算すれば、僅かに總面積の一割六分

に過ぎない。彼の佛國獨逸國の如きは耕作地の面積は全國面積の五割以上に達し、アルプス山麓の瑞西の如き國でさへ、猶ほ我國よりは耕地面積の割合が大である。古來豊葦原瑞穂國と自稱せる我國の耕作地が、前記の如く小にして外國に若かざることは、須く經世家の注意すべき處で、たとひ將來に於て耕地が擴張せられ、土地生産力が増進するにしても、毎年人口が激増し、且つ國民生活程度が年を逐うて向上するにつれて、食料を消費すること愈々増加すべきことは明白であるから、國民所要の食料の全部を自給し得ることは甚だ困難であると謂はねばならぬ。

試みに歐洲諸國に於ける耕地面積を観るに、英國は全面積の七割三分、和蘭は六割七分、白耳義は七割四分である。歐洲中、其の面積の狹隘なる是等の邦國さへ、此の如く六割乃至七割以上の耕地面積を有つてゐるのに、古來農業本位たる我國の耕地面積が、僅かに一割六分位に過ぎざるにも拘はらず、累年人口



の激増するのを自然に放任するが如きは、之を人口政策の上より見ても將また食糧政策の立場より考へても、寒心に堪へざる處である。大正二年より七年に至る迄の統計に徴するに、我國に於ける人口は、千人に就き十二人の増加を示し、世界戦前に於ける獨逸、セルビア、ルーマニアを除けば、人口の増加率は實に世界列國中の高位を占めてゐる。而して其の出産数は明治四十四年には人口千に就き三四・一の高率を示したが、爾來年々低下の傾向を示しても、毎年人口増加の数は猶ほ五六十萬人を算するが如き勢である。此の如く人口が累年増加して、食糧の供給と消費との間に著しく不權衡を來すの結果、食糧價格の騰貴となり、延いて益々生活難を甚だしからしむるに至るのである。是れ吾人が産兒調節の必要なる所以を唱道する所以の一であつて、國民が此の點に於て切實に自覺反省し其の生殖力を制限せざる以上は、之を小にしては自己の生活を益々不安定に導き、之を大にしては國家の基礎を動搖するに至るの虞があると

は、夙に吾人の力説し來つたことであるが、今や比年物價の暴騰に伴ふ生活難の襲來は、流石の生めく主義子實主義なる我國民も自然に産兒を制限するの餘儀なきに立ち到り、既に大正八年に於ては出生率は人口千に就き三一・六二に降り、前年よりも〇・五七の減少を示すに至つた。軍國主義資本主義の徒は這般の傾向を見て、國運の發展を沮害する不祥の現象なりとし、相も變らず多産の奨励を鼓吹してゐるが、併し社會の活きた事實は今や如何ともすることが出来ない。我國が英國の如くに世界殆ど到る處に領土を有し、また米國の如くに宏大なる面積を有せる邦國であるならば、人口が劇増しても何等差支なく、寧ろ國運の發展を促進するものとして之を歓迎すべきであるが、之に反して海外發展の餘裕殆ど無く、世界的に孤立せる我國の如き國に於ては、一定度迄人口の増加を制限するの要あることは自明の理であらねばならぬ。蓋し増殖する人口の吐け口を求めんがために植民地を獲得せんとし、外國を侵掠せんとするが如



きことは、最早や過去の夢となり、また肉弾を多く得んがために、或は被搾取者の數を増さんがために、人口の増加を欲する軍國主義や資本主義も、最早や今日には通用しなくなつた。たとひ彼等が口を極めて産兒制限に反對し之を抑壓せんとしても、産兒を制限するの餘儀なきに至つた近時の社會的事實を如何ともすることは出来ない。議論を以て事實を動かすことの不可能なるは分り切つたことである。

是を要するに、食物の増加が人口の増加に追いつく能はず、其のため食糧の生産額と消費額とに甚だしき懸隔を來して益々生活の困難を惹起する憂ひあるの場合、殊に我國の如き耕地面積甚だしく狹隘にして人口の激増を許さざる邦國にあつては、是非共産兒の調節を斷行しなければならぬのである。而して今や其の必要は切實に感せられ、新「マルサス」主義が一の福音として、心ある人々の耳朵に響くに至つたのは蓋し必然の歸嚮であつて、到底之を抑壓せらる

るもので無い。今や産兒調節の可否は、議論の問題よりも事實の問題となつた。如何に國家の發展、民族の膨脹といふが如き美名の下に多産を奨勵し、或は社會の風教、道德とか云ふ口實の下に避妊の害を高調して、新「マルサス」主義を葬り去らんとしても、該主義の實行を必要とする社會的事實に至つては之を如何ともすることが出来ないでは無いか。最近我國の出産率が眼立つて低下して來たことは之を雄辯に物語るものである。

以上は聊か社會的方面より論じたものであるが、轉じて個人生活の方面より觀察を下しても、産兒の調節に科學的根據の存することは疑ふべくも無い。而して這般の點に就いて先づ第一に論すべきことは、人間が自己の繁殖力を支配調節するの要あることである。

抑々動物はたゞ其の自然の本能によつて生殖するのみであるが、人間に於ては理性を以て其の本能を制馭し、子供を生産養育するに適當なる境遇及び時機



を選択しなければならぬ。されば經濟上または其の他の事情によつて子供を養育するに不適當不完全なることを自覺した場合には、須らく其の生殖力を調節するの要がある。彼の動物や原始蠻族のやうに徒らに本能のまゝに子孫を作つてはならない。これが即ち文明人たる所以である。蓋し人類の進歩が自然力の征服制馭に基因することを知らば、同じく自然力たる生殖力を制馭支配することもまた當然である。世の論者の中には新「マルサス」主義を以て兩性結合の目的に反する非自然の行爲と看做すものもあるが、併し私等より之を見れば全然誤謬の見解である。論者は須らく人生に於ける「文明」の意義を熟考するがいゝ。文明とは人類が自然を征服することである。人爲を以て自然を統御することである。裸體状態にあつた人間が、衣服を作つて外界の寒胃を防ぎ、弓箭刀銃を製して猛獸毒蛇を退治し、醫療の術を發明して病害を防ぎ、鐵道を敷き電車を作つて一瞬時の間に十里百里の道を走り、水力を役して電燈を點し、飛

行機に駕して空中を翔る等、凡て自然を意のまゝに制するのが即ち文明である。さればまた文明とは人間が自然の生活を脱して人爲生活に轉することゝも謂ひ得られる。這般の見地より論ずれば、人間が其の繁殖力を制馭し、子孫の生殖を自己の體力及び養育能力に適する範圍内に留めて置くこともまた、自然力を征服制馭する所以であつて、人類としては當然の措置である。されば吾人は彼の動物や原始民族の如くに無制限に生殖することを以て、人間の自然性に忠實なる所以と考ふることは出来ない。之を要するに、人間は自己の理性なり意志なりを以て自然力の一たる繁殖力を支配調節し、自己の健康と養育能力との許す範圍内に於て子孫を作るべきものたることを考慮しなければならぬ。されば自己の健康を破壊し、或は其の經濟的能力の如何をも顧みずして多數の子供を生むが如きは、實に自己のためにも、また種族のためにも不忠實無責任なることを念頭に銘記すべきである。若し自然の本能に任せて毫も其の繁殖力に



調節を加ふることなく、女子をして其の半生を妊娠、分娩、産褥、授乳に費消せしめ、其の體力を損し健康を害せしむるも敢へて意となさず、寧ろ多兒を以て自然に忠實なりと思惟するが如き者ありとせば、是れ實に女性虐待の甚だしきものと謂はなければならぬ。女性の健康のためにも、修養のためにも、將來其の養育すべき子供のためにも、男子は須く其の生殖力を制限すべき必然の義務がある。女子は固より生殖の任務を負ふ者なれども、併し生殖の犠牲奴隷たらしむべき者では無い。

多産が女性の健康を害し、種々の婦人病、(就中癌腫)「ヒステリー」等の原因となることは實際上掩ふべからざる事實であり、また其の子供に於ても、第四番目の生兒より體力の退化を來すことは、夙にグループ等論じた處である。加之、産兒数の多きに伴つて子供の死亡数も多く、種族繼續上より見ても甚だ不經濟なることをも銘記せねばならぬ。ホフマイエルの云つた如く、分娩

數の減少する時は其の生兒の死亡數もまた減少するもので、それは小供の數少なければ、従つて其の保護養育も善く行き届くからである。嘗て米國の女醫ハミルトンの調査した所に依るに、八人以上の子供を有する家は、四人以下の子供を有する家に比して凡そ二倍半の死亡率を示してゐる。即ち出生者千人に就いての死亡者數を見るに、四人及びそれ以下の子供を有する家に於ける死亡率は一一八であるのに、七人の子を有せる家族に於ては、其の死亡率は二八〇を算し、八人の子を持つ家族に於ては二九一、九人以上の子を有する家族に於ては三〇三の死亡率に達してゐる。此の如き事實に徴しても、産兒多ければ死亡する小兒もまた多く、徒らに生殖力の浪費に過ぎざることを切實に感せしめる。我國に於て之を見るも、大正六年度には千人に就き、三三・三人の出生率に對して死亡率は二二・四人、大正八年度には出生率三一・六二人に對して死亡率は二二・七九人である。之に反して和蘭の如き産兒調節が行はれて出生率の



少い國は従つて死亡率も少い。此の國は千八百七十六年の頃迄は出生率の多かつたと共に死亡率も多く、人口千人に就き、三十七人の死亡者を出した程であつたが、産兒制限が能く行はるゝに至つてからは、次第に死亡率減少し、既に千九百十年には千人に就いて、出生率三十二人、死亡率十八人となり、更に千九百十二年には出生率二十八人に減じた代りに、死亡率も十二人に減少した。而して國民の體格も著しく善くなつた。

然るに世の論者の中には、産兒制限を以て一種の道德的罪惡なりとし、大に非難する者がある。されど此の如き輩は人類生存の意義價値を閑却せるものと謂はざるを得ない。人間の生活と動物の生活とは大に其の趣を異にしてゐる。動物は單に生理的生活をなすに過ぎないが、人間に於てはそれ以外に社會的生活なるものがある。産兒を制限するのは、畢竟社會生活を全うせんが爲めで、即ち子供を完全に養成し健康を保全して社會的に貢獻せしめ、また一方に

は各自の健康及び經濟をも維持増進して社會的に活動するには、斷じて多兒を避けなければならぬ。人間に於ける生殖は單に子供を多く生むだけが能事ではなく、其の生んだ子供を充分に保護し教育し、生存競争場裡に出しても最早や確實なりとの見込みのつく迄は、未だ生殖の目的を達したものと謂ふことは出来ぬ。其の生んだ子供を養育し保護し教育して後、始めて種族維持の目的を達し得られ、且つ其の子供をして社會的に貢獻せしむることが出来るのである。然るに此の如き看易き道理をも顧みず、單に子を生むことのみによつて生殖の目的を達し得るものゝやうに思惟するが如きは實に思はざるも甚だしい。這般の點より之を見ても、産兒制限を罪惡視する者の偏見を憫笑せず居られない。自己の健康と養育能力との許す範圍内に於て子を作ることが、何の罪惡であらうか。吾人の見る處を以てすれば、無思慮無反省に多くの兒を生むこそ大なる罪惡である。多兒を擁する者は額に汗して働くとも費用の多端なるが故に、自己



の生活を改善し地位を向上せしむることが出来ない。また其の子供は榮養不給のため、貧血病、結核病、佝僂病等に罹り、或は普通教育さへ受けること能はずして、少年時代より墮落し、悪徒の仲間に入つて社會に害毒を流布するが如き結果になる。多兒が貧困、無學、犯罪、疾病の有力なる原因をなすことは實際に争ふべからざる事實であつて、實に子供の粗製濫造は、個人のためにもまた社會のためにも看過すべからざる罪惡である。されば社會の病弊を絶つには、先づ第一に無反省無思慮なる産兒を制限しなければならぬ。而して之を實現するには個人に自制克己の精神と義務責任の觀念とを要する。此の精神と此の觀念とが無ければ産兒制限の實を擧ぐることは出来ない。されば今日あるを知つて明日あるを知らず、現在のみ生活して未來に生活せざる如き無識なる人間には、産兒の調節を期待すべくも無い。苟くも人類生存の意義を解し、生殖の目的の那邊にあるかを知る者は、多數の子を作ることには出来ぬ。思慮深き父

母は、少數の子に完全なる教育を授くる方が、多數の子に不完全なる教育を授くるに優ることを自覺してゐる。また現在のみ生きずして、未來に生きんとする者は、多數の子を擁しては其の目的を達することは出来ない。社會及び國家に貢獻せんとする者に取つては、多兒は非常なる煩累である。此の如き見地から觀ても、産兒の制限を罪惡視するが如きは甚だしき謬見である。(完)



大正十一年十月十二日印刷  
大正十一年十月十五日發行

夫婦の性的生活奥附

定價貳圓

不許  
複製

著者 田中祐吉

東京市外品川御殿山七一八

發行者 中村 翁

東京市芝區南佐久間町二ノ一四

印刷者 渡邊 素一

東京市芝區南佐久間町二ノ一四

印刷所 内外印刷合資會社

發行所

東京市外品川御殿山  
振替東京三一七七

日本精神醫學會

電話高輪一〇四三番



慈惠院醫專教授 醫學士森田正馬先生新著

# 神經質及神經衰弱の療法

品 增補再版 四六判總布裝函入 定價 今 四圓 送料 十八錢 滿鮮支三十錢

本書は著者が過去廿年間の眞摯なる研究と經驗とに基き、  
神經質並に神經衰弱に對する在來の學說と治療法とを根柢  
より覆へしたる新著にして、其の獨創の見解に富める事と  
其の治療實例の豊多なる事とは、此種著作中恐らく本書の  
右に出づるものなからん。醫師は以て自家療法の參考に資  
すべく、病者は又其の自衛上好個の指導者を得たる思ある  
べく、一般人士は以て絶好の精神修養書となすべし。敢て  
大方諸士の一讀を薦む。

東京品川  
山殿

日本精神醫學會

電話 三三〇一  
東京 一〇一  
番 七 七 一 一  
番 三 四



Handwritten text in a decorative square stamp, possibly containing a date or signature.



終

